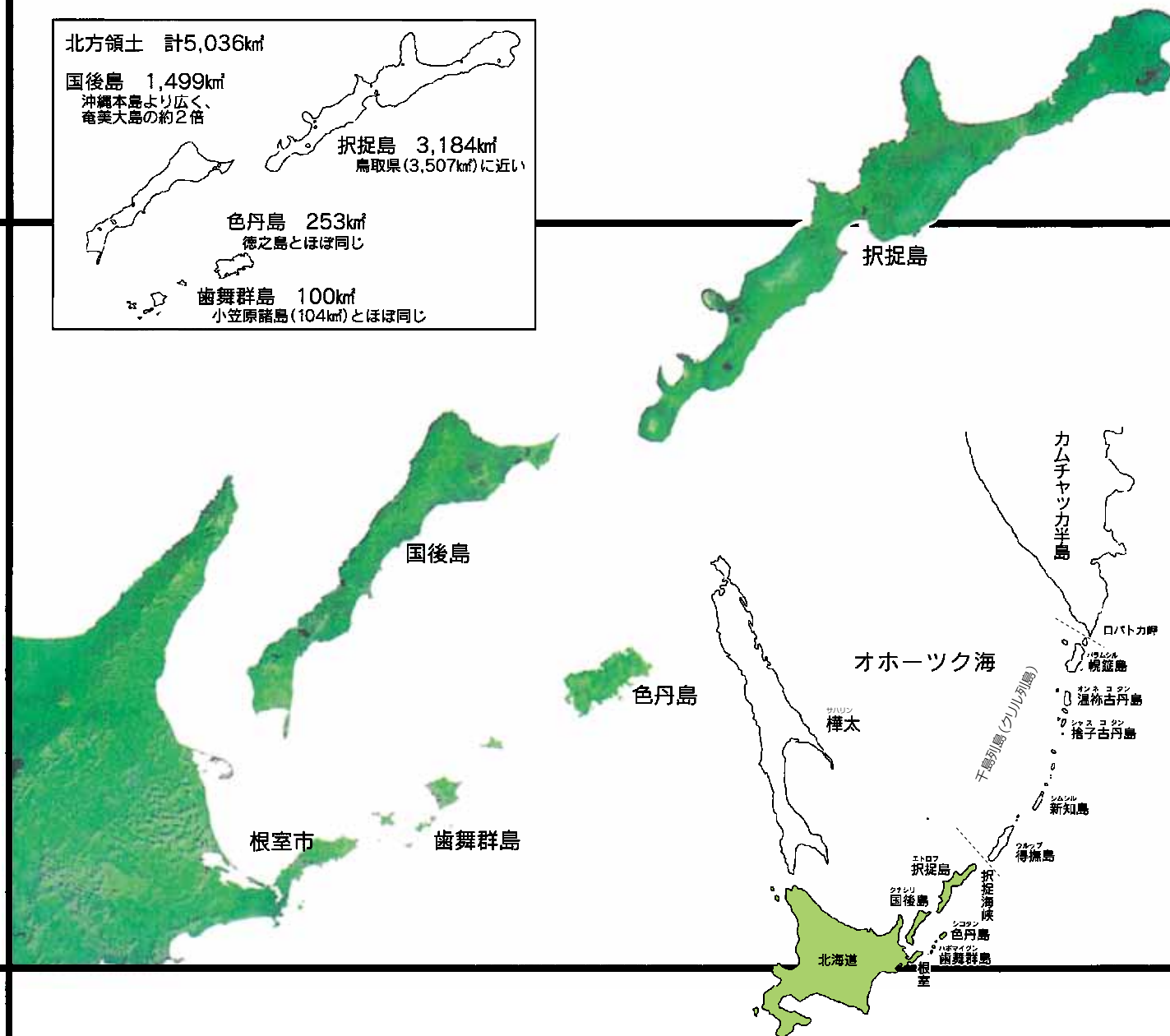
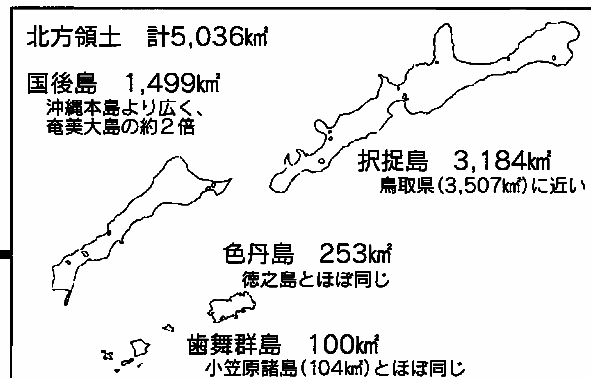


北方領土の早期返還を求めて

第23回「元島民の北方領土を語る会」集録

日本が北方領土の返還を要求するのには歴史的・国際法的に正当な根拠があります。

私たちが「北方領土」と呼ぶのは、
択捉島・国後島・色丹島・歯舞群島（多摩島、志発島、
勇留島、秋勇留島、水晶島、貝殻島など）の四島です。



徳川幕府撰正保日本国図(1644年)

「知る事」が四島返還の第一歩

(平成24年度 北方領土問題対策協会最優秀賞標語)

主催／社団法人 北方領土復帰期成同盟

も く じ

1	平成24年度「元島民の北方領土を語る会」開催要綱	2
2	平成24年度「元島民の北方領土を語る会」開催状況	3
3	「元島民の北方領土を語る会」元島民の訴え～北方領土の早期返還を求めて	
	○ 北方領土返還要求運動について 北方領土復帰期成同盟	5
	【新潟県会場】	7
	○ 志発島元島民二世 宮 脇 田鶴子	
	○ 多 楽 島 元 島 民 河 田 弘登志	
	【熊本県会場】	18
	○ 志発島元島民二世 神 林 美 砂	
	○ 志 発 島 元 島 民 児 玉 泰 子	

1 平成24年度「元島民の北方領土を語る会」開催要綱

1 趣 旨

択捉島、国後島、色丹島及び歯舞群島からなる北方四島は、我が国民が父祖伝来の地として受け継いできたもので、いまだかつて一度も外国の領土となったことのない、我が国固有の領土である。

1956年、日ソ共同宣言が署名され、両国間に国交が再開されてから既に60年以上が経過した。この間、我が国は、両国間の最大の懸案である北方領土問題を解決して平和条約を締結することにより、我が国の重要な隣国との間に真の相互理解に基づく安定的な関係を確立するという基本方針を一貫して堅持し、粘り強くソ連及びロシアに働きかけてきているが、未だ不法に占拠された状態が続いている。

領土は国家、国民にとって基本的な問題であり、今後の日露関係を真に安定的なものにするためには、是非とも北方領土問題の早急な解決が必要であり、そのためには、北方四島が当然我が国に帰属している領土であることについて、国民一人ひとりが正しい認識を深めていくことが重要である。この観点から、北方領土元島民及び元島民二世が自らの体験を通して北方領土が我が国固有の領土であることを訴え、北方領土問題の早期解決を目指し一層の国民意識の高揚を図る。

2 主 催

社団法人北方領土復帰期成同盟

3 後 援

社団法人千島歯舞諸島居住者連盟、全国地域婦人団体連絡協議会

4 開催時期・場所

平成24年10月～平成25年2月 全国3カ所

5 開催内容

(1) 説 明

内 容 北方領土返還要求運動について

説 明 北方領土復帰期成同盟（10分）

(2) 元島民の訴え

テーマ 北方領土の早期返還を求めて

内 容 北方領土の戦前の模様、ソ連軍の侵攻、強制引揚げ、返還運動取組状況、北方領土返還に向けた決意等について訴える

語り手 北方領土元島民二世（20分）

北方領土元島民 （40分）

2 平成24年度「元島民の北方領土を語る会」開催状況

開催月日／開催都市 開催団体	参加者 (人)	語り手 出身島	プロフィール
12月5日(水) 新潟県新潟市 新潟県婦人連盟	60	河田弘登志 (78) 多楽島	職 業 団体理事 昭和9年9月 多楽島生まれ 平成20年11月 引揚げ 昭和33年 根室市役所勤務 平成7年5月 (社)千島歯舞諸島居住者連盟監事 平成9年5月 (社)千島歯舞諸島居住者連盟理事 平成12年 (社)千島歯舞諸島居住者連盟根室支部長 平成23年4月 (社)千島歯舞諸島居住者連盟根室支部理事
		宮脇田鶴子 (65) 志発島(二世)	職 業 教室講師 昭和22年4月 中標津町生まれ 昭和44年4月 トヨタカラーラ鋤路(株)入社 昭和46年4月 根室生産農業協同組合連合会勤務 平成18年5月 財団法人中標津町文化スポーツ振興財団理事 平成20年3月 根室生産農業協同組合連合会退職
12月15日(土) 熊本県熊本市 熊本県婦人会連絡協議会	60	児玉 泰子 (68) 志発島	職 業 北方領土返還要求運動連絡協議会事務局長 昭和19年10月 志発島生まれ 昭和22年秋 強制送還 昭和52年 北方領土返還要求運動連絡協議会事務局長に就任 平成8年 総務長官表彰「北方領土返還要求運動功労賞」受賞 平成21年 (社)千島歯舞諸島居住者連盟理事・関東支部長
		神林 美砂 (51) 志発島(二世)	職 業 会社役員 昭和36年 根室市生まれ 昭和61年 東京たばこサービス(株)入社 平成11年 (有)ジンアドバタイジング設立
12月8日(土) 北海道名寄市 名寄市女性団体連絡協議会	悪天候 により 中止	三船志代子 (74) 択捉島	昭和13年9月 択捉島薬取生まれ 昭和22年 強制送還 昭和32年 根室生産農協連勤務 平成13年 「四島(しま)とわたし」絵本コンクール最優秀賞
		倉賀野弘行 (56) 多楽島(二世)	職 業 中学校教頭 昭和54年 留萌市立樽真布中学校 昭和58年 札幌市内中学校 平成21年 札幌市立新琴似北中学校教頭 平成24年 札幌市立栄町中学校教頭

多 樂 島



3 「元島民の北方領土を語る会」

元島民の訴え～北方領土の早期返還を求めて

北方領土返還要求運動について

北方領土復帰期成同盟

本日は、「元島民の語る会」を開催することが出来ましたことを、厚くお礼申し上げます。

また、本日お集まりの皆様方には、日頃から北方領土返還要求運動にご尽力いただき、深く敬意を表します。

「元島民の語る会」は、元島民や二世の方から、北方領土での生活や現在の四島の様子を語ってもらい、北方領土は、私たち日本国民が父祖伝来の地として受け継いできたことを再認識するとともに、北方領土問題の喚起・高揚を図るという目的で、毎年、道内外において実施しております。

当北方同盟は、北方領土返還要求に関する国民世論の啓発と結集を図るとともに、我が国の正しい主張を広く国際世論に訴え、平和的に北方領土の返還を促進することを目的としており、昭和40年4月に外務大臣許可の法人となり、現在に至っております。

皆様には、もうご存じかと思いますが、ここで、北方四島について少しご説明したいと思います。プログラムの裏表紙をご覧ください。

ここに択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島の地図が描かれております。

この四島それぞれの面積は、択捉島3,184平方キロメートル、国後島1,499平方キロメートル、色丹島253平方キロメートル、歯舞群島100平方キロメートルで、4島合わせて5,036平方キロメートルあり、大変大きな島です。

北方四島は、第二次世界大戦の最中、日本の降伏直前にソ連が中立条約に反して参戦し、日本がポツダム宣言を受諾した後に不法に占領したことが、北方領土問題の始まりです。

ソ連は、アメリカに「日本がソ連に降伏すべき地域に、全クリル諸島を含め、北海道の一部、釧路と留萌を結ぶ北海道の北側を付け加えるよう」修正を求めましたが、アメリカは全クリル諸島の占領を容認しましたが、北海道の北半分の占領は認めませんでした。アメリカが全クリル諸島に対する修正を認めなければ、アメリカの占領下に入り、沖縄と同じような対応となったかもしれません。

この不法占領に対し、その年の12月1日、当時の根室町長^{あんどういしすけ}安藤石典氏が、連合国の最高司令官マッカーサー元帥に「北方四島は、古くから日本の領土であり、米軍の保障占領下において、住民が安心して生業につくことの出来るようにして欲しい」という旨の陳情書を提出したことが、返還要求運動の始まりでございす。

北方領土が返還されないことは、我が国の主権を損なう基本的な問題であり、政府においては「北方四島の帰属に関する問題を解決して、平和条約を早期に締結する」との、一貫した基本方針を堅持し、精力的に外交交渉を続けてきております。

北方同盟では、関係機関、団体との連携を強化し返還要求運動に取り組むとともに、政

府の外交交渉を強力に支えて行くこととしておりますが、北方領土が不法占拠されて67年、返還要求運動は長期に及び、運動関係者の高齢化が進んでおります。

また、高齢化とともに活動の低下や、運動の形骸化が危惧されております。

引き続き返還要求運動を推進するためには、若い世代の方々に北方領土問題を正しく理解してもらい、返還要求運動を引き継いでいくことが大切であり、後継者育成が重要な取り組みとなっています。

最後に、北方領土、捉島、国後島、色丹島、歯舞群島は、日本固有の領土であり、日本国民が開拓し、住んでいたところです。北方領土問題は、今日お集まりの皆様方をはじめ、全ての日本国民の問題です。どうか、そのことを忘れないで何かの折に思い出して下さい。

国民一人一人の返還への願い、これが外交交渉の下支えとなっているのです。

皆様方には、今後とも北方領土返還要求運動へのご理解とご協力をお願い申しあげ、説明を終わります。

ご静聴、ありがとうございました。

【新潟県会場】

- 開催日時 平成24年12月5日(水) 10時00分～12時30分
- 開催場所 新潟ユニゾンプラザ
- 開催団体 新潟県婦人連盟
- 参加者 60名

元島民二世の訴え



北方領土の早期返還を求めて

志発島元島民二世 宮 脇 田鶴子 さん

皆様こんにちは。宮脇田鶴子と申します。先ず自己紹介をさせていただきます。北海道は道東、東の方に根室管内と言う所がありまして、世界遺産があります羅臼町、標津町、中標津町、別海町、そして根室市と言う1市4町で成り立っております。その中間地点にあります中標津町と言う所に、現在私は住んでおります。

姉妹は3人おります。父、母と一緒に住んでいました。母も元島民で、父が昭和52年に亡くなりまして、その後に千島連盟の中標津支部が出来ましたが、その時、母の都合が悪かったのかどうかは分かりませんが、父の代わりに私が行かなければならないと勘違いしまして、出席しました。その後、色々な行事に参加をさせて頂いて、今現在に至っております。

平成18年か19年頃になるのじゃないかと思うのですが、この語り部の登録をさせて頂きまして、まだ4～5回位しかしていません。未熟なお話しか出来ませんので、お聞き苦しい所もあると存知ますが、約20分間頂いております。その中でどれほど話せるか分かりませんが、どうぞ宜しくお願い致します。

まず、父は明治43年生まれで函館師範卒業です。母は大正3年に生まれておりまして、小田郡双葉女子女学校を卒業致しました。その後、それぞれ根室管内に教員として赴任して参りました。そして昭和6年から10年まで、父は国後島に4年間赴任致しました。その後、「校長にしてやるから結婚しなさい」と言われまして、昭和13年に母と結婚を致しました。そして昭和17年に志発島に母と赴任致しまして、終戦を迎えました。そのため父、母、姉が元島民、私が後継者と言う事でこの活動を行うようになりました。

北方領土は資源の豊かな所で、昭和6年から10年まで勤務しました国後島は、父に言わせると、とても良い所だったそうです。資源は豊富で食べる物には困らない。教育者として教育して行く上で、島の人達の人柄が素晴らしかったと言います。教育者として何かをやる時に、全て受け入れてくれた。教育者冥利に尽きる、と言う事を言っておりました。

そして、国後島から転勤して根室に来ましたけれども、また島に行きたいと言う事で、択捉島に行っています。戦争の色が濃くなった時なんですけれども、また島に行ったと言う事で、如何に島が好きになってしまったか

と言う事がお分かり頂けるかなと思います。

北方四島と言うのは、国後島と択捉島そして色丹島と歯舞群島と言う小さな島々でなっているのですけれども、歯舞群島の中でも一番大きい島が志発島になります。約60平方キロメートル、終戦時には374戸、人口が2,249人居たと言う事です。

終戦を迎えまして、9月3日にソ連軍が志発島へ上陸して来たそうです。その時、軍隊は国後島に引き揚げ対戦してくれなかったそうです。軍隊はもう国後島に引き揚げてしまった。それで婦女子は、ロシア人に何かされると嫌だと言う事で、裏山に逃げたり、2～3週間島を離れると良いのじゃないかと言う事で、2～3週間の食料を持って根室に船で逃げました。その時に、うちの母と姉がその方達と一緒にさせて貰って、逃げて来ました。

父は、学校を守らなければならないので残りました。残りはしましたけれども、生徒がいないですから、学校を再開するにも出来ない。それで「これからどうしたら良いか」と言う事を、根室の教育局に再三に亘って連絡を取ったけれども、全然「こう言うふうにしなさい」と言う返答が返って来なかったのだそうです。

そして2～3カ月しました時に、もう埒が明かないと言う事で、ちょうど根室に来る船がありまして、残っている先生方には何も言わないで、それに乗せて貰って根室の教育局に行ったそうです。そうしたら、「もう帰らなくて良い」と「島に戻らなくても良いよ」と言われてしまったので、父はそのまま残ったと言う事です。

昭和33年頃、千島連盟が出来ました。返還運動が盛んになって来ておりましたけれども、その中で父達も千島連盟回想録や、島の生活を忘れちゃいけないと言う事で色々と物を書いたりしておりました。その中で、「島が返って来たら、もう一度島に行って教育をし直すんだ」と言う事を言っており、私は小

さい時から常々聞いていましたので、その事が支部が出来た時に私が行かなければならないと思った要因なのかなと思っています。今になって何で行ったのだったのかな？といつも不思議に思うのですけれども、これも何か惹かれるものがあったのかなと思っております。

最初の頃は、何も分からずに参加をしてました。北方領土がどう言うものかと言う事も、島を捕られたと言う事も何も分からずに参加をしていました。その時は、元島民の方も若くて活動をしていましたし、参加をするだけで良かったんですけれども、10年、20年と参加をしても、いつまで経っても返って来ません。そしてその内に、元島民の方も段々亡くなったとか、高齢になって来て色んな所から手伝ってくれないか、と言う事になりました。夏・冬に署名活動をやっているのですけれども、そこにも手伝ってくれと言う事になって、行くようになりました。

署名を皆さんに呼び掛けるのですけれども、署名して下さる方もいます。でも、中には「何をやっているの！こんな事をしたって島は返らないよ」「あんた達のために何で署名しなきゃならないの！」と言われるのです。「あんた達のため」なんです。「元島民のため」なんです。そう言う言い方をされまして、返す言葉がありませんでした。何も分かりませんでしたから。でも、それでもやっていました。色々な行事に参加しながら、色々勉強して。

「戦争に負けたんだから仕方がないでしょう」「当たり前でしょう」ロシア人もこの頃言いだしてます。戦争で獲ったんだから日本に返さなくても良いんだと言う事を。

けれども、この返還運動に後継者として携わって、色々な事を勉強して行く内に、元島民だけの問題じゃない、日本の国の問題であって日本の領土の問題じゃないかと思うようになって来たのです。だから、元島民の人達が帰りたいのはやまやまなんですけれど

も、元島民だけのためじゃなくて、日本国の領土の問題なのですよ、と言う事は日本国民全員が考えなきゃならない、そう言う事だと思うのです。

それで「国民の問題だよ」って言えるようにならないといけないと思います。元島民の方達が高齢になって来ます。私達も段々年を取って来て、もう戦後67年ですから60歳になって来ています。だから、段々動けなくなって来るので、早く何とかして欲しいと言う気持ちがありますけれども、その思いを「皆さんこうなんですから、是非、お願いします」と声を大にして言えるのは、やはり元島民です。こう言う所で「私達の問題じゃないですよ、国民全体の問題ですから一緒に考えて下さい」と言う事を言えるのは、私達なのかなと思って、参加をさせて頂いています。

そしてその中で、元島民の人達は領土返還の実現を願っていますけれども、私達後継者はその元島民の願いの返還と、国民の領土への関心を廃れさせないように、より関心を高めてもらう事をやって行かなければならないのじゃないかと。それが、私達後継者の使命じゃないかと言う事で頑張っています。

そして若い子供達にも、北方領土の事に少しでも関心を持って貰おうと思ひまして、今年は「エトピリカ」と言う新造船が出来ましたのでそれを使いまして中間地点まで、北海道と北方四島の間の中間地点の近くまで行って、国後島しか見えませんが、こんなに近いんだよ、と子供達に少しでも北方領土への理解を深めて貰おうと思って洋上セミナーという事業に取り組んでいます。

署名活動をやっている、北海道民の方ですけれども北方領土問題に対して関心を持っていない人がいるのです。「あんた達のために何で署名をするの」って言う人達もいますから、そういう人達を少しでも少なくして行かなければいけないと思ひまして、キャラバン隊を組みまして道内を周りました。

北海道内は広いです。北側、中央、東、南、

函館方面、西と言うように道内の各市町村を周って、市長を表敬訪問をしたり、その地区で署名活動をしたりしながら周りました。今度は北海道が終わったのだから東北に行こうと言う事で、皆さん働き盛りで中々暇を取れる人がいないのですけれども、土日を含んだら何とか行けるだろうと言う事で、今年は青森県を回りました。青森市と弘前市の2カ所程で署名やって参りまして、月曜日の朝、表敬訪問をして帰って来ました。

お金が余りありませんので、一年置きに道外に行こうと言う事になって、来年は北海道、再来年は東北をまた周りますけれども、何処になるか分かりません。もしかしたら新潟にと言う時があるかも知れませんが、その時は宜しくお願ひしたいと思います。

後継者としてそう言う事でお願いをしておりますけれども、根底には国民の領土なのですよ、と言う思いがあつてやっております。北方領土は元島民だけの問題ではありません。どうぞ、国民全員の問題なのだという認識を持って頂きたいと思ひます。そして皆様方には返還の声を大きくして頂き、国に肝を据えて返還交渉をしなければ駄目だと言うように取り組んで頂きたいと思ひます。どうぞ皆さん、宜しくご理解の程、お願ひ致します。



北方領土の早期返還を求めて

多楽島元島民 河田 弘登志 さん

私は先程ご紹介を頂きました河田と申します。後継者の方からお話がありましたけれども、一口に北方領土と言いますが、場合によっては北方四島と言います。そうしますと、北方領土は島が4つしかないとお考えの方もいらっしゃるのですけれども、今お話になった方も私も歯舞群島の出身でございます。ですから、歯舞群島につきましてはもっと詳しく、人が住んでいた島が5つあるのですよ、と言います。

一番近い所は、7キロ離れている所の水晶島、秋勇留島、勇留島、そして群島で一番大きな志発島がありまして、それから少し離れた所に多楽島と言う小さな島があります。僅か12平方キロですね。そう言う島で生まれたのです。

私が北方領土問題で新潟県にお邪魔したのは、これまで数回あります。初めは昭和44年です。昭和42年から始めたキャラバン隊は44年に全国に行きました。その時に青森に上陸しまして、その足で秋田とかを周って新潟まで参りました。新潟で一泊をして、群馬県を抜けて東京方面に向かいました。それから、地元根室の中学生を引率して勉強会のため何回か来ております。佐渡島にもお邪魔をした事があります。そう言う事で、大変ご縁があるのではないかと思います。

もう一つ、北方領土の事業で根室に全国から皆さん方が集まってきます。その時にお会いになった方が、今日お集まりになっている方の中におられるのではないかと思います。

新潟県と北方領土の問題の関係についてお話させて頂きますけれども、新潟県は北海道

や千島列島、北方領土も含めまして、非常に近い位置にあります。早くから、新潟県の人には北海道に渡り、そして千島列島の方に行って漁業の開発とかをやったと言う歴史的なものがあります。

なかでも、皆さんご存知の方がいらっしゃるかと思うのですけれども、碓氷勝三郎さんと言う方がいらっしゃいます。その方が明治8年に根室に渡って、そして歯舞群島や国後島に出掛けて漁業の開発、あるいは缶詰工場とかをやっていました。今も根室におります。今は何代目かになりましたけれども、後にその方は酒造業を始めましてお酒を造っております。新潟の米を使って今もやっているのですけれども、碓氷商店の「北の勝」と言うお酒がございまして、多くの方に親しまれて愛飲されていると、そう言う事があります。

それからもう一つは、富山県とか新潟県の方が非常に北方領土に関係があるものですから、根室にも多くの方がいらっしゃいます。現在も、根室に新潟県の県人会があります。そう言う事で、皆さん方とは非常に繋がりが深いのではないかと思います。

北方領土の面積とかは先程お話がありましたけれども、北方領土には人が住んでいた島は4つでは無いのですよ、8つあるんですよと言う事を覚えておいて頂きたいと思います。

私が育った多楽島は、本当に小さい島です。僅か12平方キロと言う、小さな面積ですけれども、人は1,500人位住んでおりました。北方領土には、学校が39校あったのですけれども、私が通っていた多楽島の学校は240名が通っていました。生徒数が一番多い学校でし

た。

齒舞群島の周辺は昆布の宝庫です。今も、ノサップ岬周辺で採れた昆布を皆さん方に食べて頂いていると思うのですけれども、非常に昆布の宝庫でした。今採れている量の何十倍も採れました。島の地形から言って、多楽島が小さな面積の割合に人が多かったと言うのは、島が平坦なものですから昆布漁に適していたのです。今のように港が無いですから、自分の家の前に船を着けて、乾燥させる砂浜が無ければならない。そういう事で非常に地形的にも恵まれた所だったのです。ですから、等間隔で島の周辺に切れ間無く住んでいた、そういう島でございます。

私の先代の爺さんと言うのは、父親もそうなんですけれども、富山県出身でして、爺さんは17、18歳の位の頃から根室に足を向けて、そしてその内に島の方に行くともっと良い収入があると言う事で行ったらしいです。父親も母親も島の出身と言う事で、北方領土の開拓と言うのは3代～5代に亘って、草を一本一本手で抜いて、そしてマメを作り、血を出し、汗を流して、涙を流しながら開拓した、そういう貴重な島なんです。

こうして開拓した北方領土なんですけれども、当時は電気も無い、何も無い。娯楽も、何にも大した事は無いので、一番楽しみにしていたのは、島を挙げての運動会であるとか、学芸会であるとか、お祭りであるとか、そういうものが非常に楽しみだったですね。

島を挙げて全員集まってやるので、唯一の楽しみだったのですけれども、昆布漁期になりますと、朝から晩まで子供も大人も2時、3時に起こされて昆布干しとかを手伝ったものです。ですけれども、そういうのは5月から大体今の時期位までの間ですね。言ってみればデカンショ節のような生活をしている。1月、2月、3月になるとほとんど仕事が無くて、隣近所に集まって花札をやるとか、宝引きをやるとか個々の家を周ってそういう楽しみもありましたけれども、そういう時期は

青年団が活動致しました。

青年団の家1軒、1軒を宿にして回り順番です。そろばんの練習をするとか、それから人の前に立ってお話をする。何も無かったら「昔、昔…」でも良いですよと、そういう訓練を随分やっておりました。私も小学校の3年生の時から、どうも夜遊びが好きだったのですね、付いて歩いたんです。3年生、4年生の子供が付いて歩いていると言うのは他はいないのですけれども、そろばんの練習に加わったり、お話を聞かせて貰ったりしました。今考えてみると、当時おやつがあまり無い時期で、お宿になった所では何かにかを出してくれる訳ですね。それに魅力があって行ったんじゃないかと思うのですけれども、4年生まで付いて歩きました。

それが、今のこうした返還運動をやるのに大変なためになっています。と言うのは、当時から付き合った先輩達と後に一緒に運動をやるようになって、色んな事を教えて頂いたと言う事で、夜遊びもまんざら無駄では無いなと奨励する訳ではないと思っています。

色んな形で、不便は不便なりに或いはまた何も無い中で、島中の人が一家のような形で誰が病気をしたとか、何処にお祝事があったとか、島の人がこぞってやりました。戦時中ではあったのですけれども、比較的平和に暮らしておりました。空襲も無ければ何も無い、向かいの方から見える根室市は空襲を受けた。平和に暮らしておりましたけれども、そうしている所に昭和20年8月15日、終戦を迎えた訳です。

ちょうどその時は、私の父親も昆布漁に出ている、帰って来てそのニュースを聞いたのです。夕方に戻って来て、初めてそのニュースを聞いて、父は兵隊経験があるものですから浜に座り込んでしまったのです。がっくり来てですね。そして時間が経つにつれて「こうはしてられない。また明日から一生懸命働いて頑張て行こう」と言っている矢先に、ソ連軍が9月の初めになって上陸して来たと

言う事です。

ソ連軍が上陸した時に、どう言うような状況だったかと言うと、私の住んでいる所からちょっと離れた後ろ側の方、北側から上陸して来たのですね。その時は日本軍もありました。

日本軍がその時に何をやっていたかと言うと、広場に集まって、戦争に負けた訳ですから、天皇陛下からお預かりをした武器を返さなきゃならないと、「返納式」と言う事をやっていたのですね。そこにソ連軍だとはっきりしていたかは分からないのですけれども、上陸して来た。多楽島には、三重県の出身の方が多く、磯田さんと言う人に「お前ちょっと行って偵察をして来い」と言いました。その人は、私の隣の家の馬に乗って偵察に行ったのですけれども、上陸して来るソ連軍と中間で出くわして、後に捕虜第1号になったと言う風に笑っておりました。

乗って行った馬にソ連軍の隊長を乗せて、自分は胸を張って手綱を持って雄々と家の前を通って行ったのを見ております。将校は、銃を持って何事か起きないかと思いキョロキョロしながら通って行ったのを覚えております。

その後、兵隊が2人1組になって上がり込んで来たのです、銃を持って。私の家は新築して1週間か10日位しか経っていなかったのですけれども、そこに土足で上がって来たものですからびっくりしました。小学校5年生の子供ですからね。そして、親の後ろに隠れるようにして見ておりました。

まず一番先に言ったのは、アメリカがいなかと言う事を一番先に言いました。それから、日本の兵隊を匿っていないか。それから、銃とかそういうものを隠し持っていないかと銃で天井を突くのです。一応そういうものが無いと分かったら、今度は私物を欲しがったのです。何を欲しがったかと言うと、子供でも分かるのです。「トッキ、トッキ」と言うのです。腕時計が欲しかったのですね。今の

ように、たくさんある訳じゃないですから。私の家は盗られませんでしたけれど。そして柱時計とか目覚まし時計とか、これをやると言うそれは駄目だ、トッキだ、腕時計だ。家ではそういうものが出来なくて、今度は何を言ったかと言うと、「サッキ、サッキ」と言いました。サッキ、酒ですね。酒が無いと言う事です。

清酒とかを瓶に入れて、口を閉めておくと匂わないのですけれども、当時はそういうものはあまり手に入らない。うちの爺さんと言うのが、晩酌に飲みたい方だったものですから、母親が気を利かせて最初は甘酒にする。それが段々発酵してくると大変良い酒になるのですね。それを瓶に入れて戸棚の下に入れていたものですから、これが匂ったのです。開けて見ているうちに見つかりました。その時には飲ませろとは言わなかったです。家から持って行かれたものは、引き出しを開けて剃刀であるとかバリカンであるとか、そういう物を持って行ったんですけれども、その光景を兄弟5人が私を頭にしまして、親の背中からじっと見ていた。

ロシア人が上陸した時、一番頼りにしていたのは日本の軍隊です。当時は若い人が皆兵隊に行っていないのです。私の父親も、その時は30代だったのですけれども、在郷軍人会と言って、若い人達を訓練する立場にあったものですから、そういう人達が何人か残っていましたが、一番頼りにしていたのは軍隊です。その軍隊も、間もなく連行されて行ってしまったのです。

「ダモイ」と言って、出身地の三重県に帰れるんだなと思っていたのでしょけれども、後々復員して帰って来た時に聞いたら、「シベリアに5年も6年も抑留された」と言う事でした。

それじゃ残った人達はどうなったのかと、そのまま残っていた人ですね。夜間外出はもちろん駄目です。あまり島の中を自由に行動出来なくなりました。それから9月と言えば

漁業の時期です。私も夕方、父親の船に乗せられてイカ漁に出たのです。あちこちでも出てました。その時は何とも無かったのです。夜、物凄いエンジン音を立てて、皆、一斉に帰って来ました。今のようにディーゼルエンジンじゃなく、焼玉エンジンと言って物凄い大きな音です。私は善に考えて、兵隊の方がびっくりしたのだろうと思ったのですけれども、撃たれたのです。そう言う事件が起きると安心して島に居れないと、そう言う事です。

それから、一つ言い忘れましたけれども、ソ連軍が上陸して来た時に何を一番心配したかと言うと、女性を一番心配したのです。やはり、兵隊経験のある大人の知恵ですね。変装して、物置きや馬小屋、裏山、押入など至る所に隠したのです。この島には、若い女性が居ないのかと言う位にしてしまったのです。やがて時間が経つにつれて、何とも無い、大丈夫だと言う事になってから、ようやく出て来たのですけれども、そう言う状態になってしまったのです。

その後の生活ですけれども、事件があると安心して島に留まっていられないと言う事で、一時避難的に、逃げたのではないです。良く逃げて来たと言うものですから、何で島を捨てて逃げたんだと良く言われましたけれど、一時避難的に家はそのまま、小さなエンジン付の船に乗り合わせをして、身の回りの物を少し持って、夜陰に乗じて脱出が始まりました。ですけれども、陸からエンジンを掛ける事が出来ないのです。掛けたら発見されるし、それからもう一つは最短距離を通る志発島にソ連の軍隊がびっしり、軍艦もいると言う事で、太平洋をずうっと迂回をする。通常の2倍も3倍も時間を掛けて、根室を目指しました。沖合まで櫓で漕いで行って、ここなら大丈夫だと言うような所まで行ってから、更に用心のために煙突に濡れムシロで囲ったりして、エンジンを掛ける。そして更に迂回です。ですから今晚は、波も良いし大

丈夫だと思っている時に出るのですけれども、途中で時化に遭ったり、思わぬ所に漂流してせっかく積んで来た荷物を捨てる。命が欲しいのか荷物が欲しいのか、やはり荷物を捨てて現地の人に助けられた、そう言う人も沢山おられます。

しかし、60何年も経って、まだ着いていない人がいるのです。まだ着いていない人が。一家で、家族の殆どを亡くしたと言う人もおられます。そう言うような難儀をしながら、大体、元島民17,300人の内の半分位は自力で脱出をしました。それから地域的に言うと、主には齒舞群島と色丹島、それから国後島でも羅臼の方に入り込んで来ている、隣村と言うのですけれども、そう言うような近い人ですね。同じ国後でも、爺爺岳のある、遠い所、択捉の人は絶対に出来ません。時期的に言っても小さな船で脱出は難しい。そうして約半分の人が一時避難的に、島を離れたのです。

それじゃ残った人はどうなったのかと言う事です。昭和22年、23年に強制送還されました。私の家族もその時にバラバラになったのです。私は弟と2人で、学校に行く為と言う事でソ連兵に断って出て来たのですけれども、後の家族皆6人残りました。

私の家族の事を言いますと、昭和22年9月6日に突然、たまたま来ていたソ連の調用船に「今これに乗って出ろ」と身支度をして飛び乗りました。そして、根室に向かうのかなと思ったら、隣の志発島に連れて行かれた。そこで約半月間収容されたそうです。やがてソ連の大きな貨物船が来て、それに乗せられた。皆さん、ソ連の船に乗せられてと言うと、特に若い人なんかでは今の客船を想像すると思うのですけれども、そう言うものは当時ソ連にもなくて、貨物船です。

大きな船は陸の方まで着けられないですから、ずうっと沖合いにいる訳ですね。そこまで小さな船に乗せられて行くのです。どうやって乗ったかと言うと、今はあまりそう言う光景は見られないのですけれども、大きな

網目のモッコをウインチで吊り上げて、荷物のように積み込む、荷物ですね。そしてダンベルの中い入れられたと。

私の父親は入る所が無くて、甲板に出ていた。船乗りですから、毎日のように根室に通っていたので、計算すると2〜3時間位我慢すると根室に着くと思い甲板にいたらどうも空を見たら走っている方向が違う。北へ北へと走ったのですね。やがて辿り着いたのは、樺太の真岡。そこまで連れて行かれたのですね。残った人はそう言う形で、船に積み込まれて貨物同然に連れて行かれたのですね。

一番大変だったのは何かと言うと、もちろん寒さです、秋ですから。それと食料も無い。これも大変です。ですけれども、その中でも一番困ったのはトイレの問題です。貨物船ですから、そんなにトイレがたくさんある訳じゃない。そうすると何処で用を足したかと言うと、甲板まで梯子を登って甲板でする訳ですね。日本の船もそうなんですけれども、デッキ割と言う風になっていて、波が入って来ても波が下に落ちないようにしている。そう言うような事で甲板でする。風の良い時ばかりではない。時々荒れてくる訳ですね。そうしますと、それは自らしたものが又自分の所に戻って来る。そう言う大変な思いをした。ですから船の中でも老人であるとか、子供が犠牲になった。亡くなった人をどう言う風にしたかと言うと、水葬ですね。海に流してやる。

やがて真岡に着いたんですけれども、先客がいる訳です。先に来た人が、女学校を改装して、昔の人なら分かりますが「たむろ式」にして、畳2枚位に仕切る。うちの家族は、2枚の中に6人入れられた。そう言うような生活をしていた。

もちろん食べ物はないし、水を貰うにも行列して貰わなければならない。そう言う所でも多く犠牲になりました。犠牲になった人はどうしたかと言うと、私の母親が若い時は何処の人もそうなんですけれども、そう言う事

を、戦後間もなく話したかと言うとそうじゃないんですね。こっちに来てからの生活が大変ですから、子供達とかにそんなに話をする余裕が無いのですね。

母は、平成13年に88歳で亡くなったのですが、その頃になってようやく、当時の事を話するようになりました。あの樺太で、亡くなった人の遺体はどうしたかと言うと、もうその頃になると土が凍っていますから、溝を掘ってその中にただ遺体を転がしたと言うのです。本当にね、一握りの土も掛けてやる事が出来なかった。「悔しい、悔しい」と亡くなる間際になってから、そう言う話もしておりました。

現実に私の知っている人でも、妹さんを亡くしたり色々あって、何とかお墓参りが出来ないかと。自分の妹とか、家族のお墓が何処にあるか分からないのですけれども、私は色んなお願いをして、去年か、一昨年か、その人は行って来ましたが、そう言うような状態になっております。相当な人が亡くなったと言う事です。

そう言う所に約1カ月半収容されて、もちろん食べる物も何も無いです。やがて函館から日本の引き揚げ船が来て乗る。乗せられて函館に入ったのです。函館に入って、私は根室の方にいましたから、伯父さんの家に世話になっていたのですけれども、その頃は今よりもっと遅いです。回りまわって来たのは、12月になろうかと言う頃来ましたが、本当にね、来てもどうぞお入り下さいと言えない。親戚の家でも、そう言えるような格好じゃなかったですね。着の身着のままですから。おまけに函館に入ったら、頭からDDTを掛けられて真っ白になって。今見たくても見られませんね、蚤とか虱とかは。もう真っ白です。そして着っぱなしですからドロドロ。

良く世の中に「着の身着のまま裸一貫」と言う言葉がありますけれども、私はあれ以上の「着の身着のまま裸一貫」と言うのは無いと思っています。そう言うふうにして我々は

帰って来たのですけれども、昭和22年と23年にまたがって、残っていた人が強制送還されたのです。

ですから先程も言ったんですけれども、良く言われますけれども決して島を捨てて来たんじゃないんです。止むにやまれぬ形の中で、そして脱出した人なんかは来春になったらソ連兵がいなくなるだろう。そして、またそこに住んで仕事をしようやと言っておりますから、ご飯を食べたら食べたまま、テーブルも出しっぱなしで来た人もたくさんおりますので。そういう風にして、島の人がほとんど強制送還されて現在は誰もいない訳です。

ところが、引き揚げてからの生活が大変でした。入る家ももちろん無いし、先程も言ったのですけれども、根室の町は、終戦のちょうど一カ月前、7月14、15日に空襲に会って中心部の80%が焼けたのです。そういう時に来た訳ですから、もちろん食べる物も買えない。私は、田舎の伯父さんの家に世話になったのですけれども、一年の内に何回も住処を変えなきゃならない。最初は漁時期に皆さんが使っている番屋ですね、秋になると引き揚げて行って自宅に帰る。そこへ入ったんですけれども、春になるとまた漁師さんが来る訳ですね。

次に、何処へ行ったかと言うと馬小屋です。馬と一緒に居るんです。そこで寝起きして、食べているんですね。そういう所にも入りました。物置きであっても、何であっても色々な所を転々として歩いたんです。一昨年、東日本大震災がありましたね。あの光景をご覧になったと思います。ああ言う体験を、私達は60何年前にしているのです。誰も援助してくれないです。掘立小屋の地べたに筵を敷いて、生活したと言うのも何年もあります。周りから凍って来るんです。ただ穴を掘って、柱を立てて板一枚打って窓枠を入れていますが、風はビュービュー吹いて来る。そういう所で多くの人が生活しました。

ただ、人間って色々な条件に対応するもの

ですね。死ぬ事も無く、今までこう言う風にして生きております。ですからあの光景を見て、私は非常に気の毒だなと思ったのです。そういう体験をしているだけにですね。

私達もそういう体験をした事は、ずうっと言わなかったのですけれども、ある大臣が来た時に一番手っ取り早いのはそういう状況を話をするのには、東日本大震災のと比較した方が一番良いだろうと思って言ったら、びっくりしていました。

もうこちらに来たら普通の生活をしていたと思うのですけれども、私個人的に言えば、何とか自分の家らしいと言うか、そういう所で生活するまでに10年以上も掛かりました。その間、転々と色々な所に移動しながら生活をしておりました。

先程も宮脇さんの方からお話がありましたけれども、返還運動。今更申し上げるまでも無いのですけれども、歯舞群島、色丹島、国後島、そして択捉島は歴史的に見ても、国際法上から見ても日本固有の領土です。そして、私達はこの世界の三大漁場といわれるその周辺に資源があるから返せと言っている訳でもなければ、それから面積の大小で返せと言っている訳でも無い、日本の固有の領土だと言う事ですね。

そして、一番大事な事は国家の主権と尊厳に関わる問題でありますよと。それからこの北方領土問題は、元島民や一地域だけの問題では無いんですよ。1億2千万、一人一人の問題ですよと言う事を皆さんに訴えているのです。ソ連、ロシアに不法占拠されてから、もう既に67年が経ちましたけれども、昭和20年8月15日に終戦になりました。そしてその一カ月前に先程も言ったけれども、根室の町は中心部の80%が空襲で焼けました。そう言った大混乱の時に、時の根室町長安藤石典が昭和20年12月1日に、マッカーサー元帥にこれは日本古来の領土だ、何もソ連に占領される言われは無い。連合国の補償占領下に置いて欲しいと陳情したと言うのが、今に繋が

る返還運動の始まりでございます。

この日を記して、今年もやったのですが、東京の銀座で中央アピール行進をやってきました。しかし、全国民の運動と言いながら、まだまだ関心が無い、知らないと言う人がたくさんおられるのではないかなと思うのです。

昭和56年2月7日を北方領土の日と決めましたですね。今日お出でになっている方は知らないと言う人はいないと思うのですが、まだまだ残念ながら全国的に調べると知らないと言う人がいるのです、今もってですね。

これはやはり、何が大事なと思うのですが、次代を担って行く青少年の教育が一番大事だと思うのです。北方領土問題をしっかり勉強出来る、学習出来る人。そういう方法にしないと駄目です。ですから、色々な大臣に言うのですが、小学校、中学校、あるいは高校、大学と一貫した領土教育をやって下さいと。あるいは、社会教育の中でも取り入れて下さいと言っています。そうは言っても勉強しなければならないと言う環境を作らなければ駄目なんです。「すれ、すれ」だけじゃ駄目なんです。それで私は、高校、大学の入試、それから就職試験、官公庁が率先して試験に北方領土問題を取り入れて欲しいと言う事を毎度、毎度お話してます。そういう環境作りが大事なと思っております。

「百聞は一辺に如かず」と言いますが、僅かノサップ岬から3.7キロ沖合の所に貝殻島の灯台があります。手を伸ばせば届くような所です。元島民も半数以上の方が亡くなりましたし、平均年齢も78歳になりました。もう私も78歳を超えてしまいました。ずうっと一日も休む事なく、その間、返還運動をやってきました。現在の状況になって参りました。

私達は今後も、四島の返還が実現するために、粘り強く運動を続けて行きたいと思っておりまして、どうぞご支援の程お願い致し

たいと思います。

私の生まれ育った小さな島、多楽島の事を中心にお話をさせて頂きましたけれども、何か一つでも参考になって、今日お越しになっていない方に一言でも二言でも、お話しして頂ければ有り難いなと思っております。

結びに新潟県の婦人連盟の皆さんの益々のご活躍とご健勝を祈念致しまして、終わらせて頂きます。ありがとうございました。

国 後 島



【熊本県会場】

- 開催日時 平成24年度12月15日(土) 10時10分～12時00分
- 開催場所 熊本県婦人会館
- 開催団体 熊本県婦人会連絡協議会
- 参加者 60名

元島民二世の訴え



北方領土の早期返還を求めて

志発島元島民二世 神 林 美 砂 さん

皆さん、お早うございます。只今ご紹介頂きました、神林と申します。先程、北海道からおっしゃって下さったのですが、生まれは北海道なんですけれども、現在は横浜に住んでおります。こうしてたくさんの方にお集まり頂きまして、お礼申し上げますと共に日頃北方領土返還要求運動にご尽力頂いている事に敬意を表します。

また、先程会長さんがおっしゃってありました県内での連携もありますけれども、私達とも繋がって行ける所は一緒に繋がってやって行ければと思っておりますので、宜しくお願い致します。

本日は、このような機会を頂きましたので熊本県と北方領土、少しでもなんですけど、関連のあるお話を2つしてから本題に入りたいと思います。

熊本と言えば、単純に阿蘇山を思い浮かぶのですが、そのイメージは噴火、カルデラ、観光ですね。国後島と択捉島には、火山が連なっていて活火山もとても多いです。択捉島に焼山と言う、地図で言うと紗那のちょっと奥になるのですが、この山は今年の春に噴火をして、ビザなしで行った方々も噴煙を確認しています。

火山が多いと言う事は、温泉も湧き出ている川の水で温度調節をするような自然そのままのものもありますけれども、最近では施設を整備して、住んでいるロシア人も温泉を楽しんでいます。

また、選挙の焦点にもなっているエネルギー問題。国後島と択捉島では、この火山の地熱を利用して発電しておりまして、必要な電力を賄っています。

もう一つは、熊本イコール馬刺しで、昨日もちょっと頂いたのですが、馬の話です。戦前、島々では交通手段が馬だったので。また、昆布を運んだりとか運搬の力としても、とても大切なものでした。島には駅停と言って、各村々に馬を乗り換えたり、休憩出来る場所があって、長い行程の時にはそこで馬を乗り換えたり休んだりして目的地に向かっていたと聞いております。個々の家でも馬を飼っていて、子供達が世話係だったと言う事と、元島民の男の子は馬に乗って野山を走り回っていたそうです。

この後、お話される児玉さんの志発島と言う所では、家の母もなんですけれども軍馬を育てていて、私達が元島民で自由訪問で行った時にひょっこり顔を出して来たり、その子

孫なのか馬は現在もいます。と言う事で熊本の話はここまでで、本題に入ります。

私は、先程も申し上げたように根室で生まれて根室で育ちました。母は歯舞群島の志発島。子供の頃、ノサップ岬から見えるあの島々には、大きなロシア人が住んでいると思っていました。根室では、小学校の高学年になると社会の時間に北方領土の授業があって、地理的な事とか歴史、戦前の暮らしぶり等を学びます。返還運動に加わってから約20年、色々な機会を与えられましたので、今日は私が見聞きして来た事をお話して行きたいと思います。

始めに四島の概要に付いて簡単に、触れさせて頂きます。国後島は沖縄よりも少し大きくて、択捉島はその2倍以上、2つで四島の93%の面積を占めています。この2島は山々が連なって、多くの川が流れて雄大な大自然の島です。

国後島の爺爺岳、さっきも火山の話をしていましたが、四島で一番高い最高峰で美しい山です。島の東北、択捉島側にあります。私が6年生の時に、この山も大噴火をして根室にも真っ暗な灰が降って、傘をさして学校に行った事を良く覚えております。

択捉島の太平洋側には、真珠湾攻撃に向かう連合艦隊が終結した単冠湾。そしてオホーツク海側には、昭和20年8月28日、ソ連軍が四島の中で一番最初に上陸して来た留別があります。

色丹島は、なだらかな丘が続く緑の美しい島です。アナマ湾は深く切れ込んだ漁港で、昔も今も嵐の時の船の避難港になっております。歯舞群島は起伏が少なく、私達はせんべい島なんて呼んでいるのですけれども、主な島々の周辺には海鳥や海獣類、トドとかアザラシとかが多く生息する大小様々な岩礁があります。

戦前、四島には17,291人が住んでおりました。漁期には、多くの出稼ぎの人もいたそうです。島民は海からの豊かな恩恵を受け暮ら

しておりました。当時は冷凍技術がありませんから、採れた魚介類、海藻類は塩蔵、塩で漬けたり、乾燥、後は缶詰に加工しておりました。皆さんお馴染みの昆布はとても良質なものでした。今もですけれども。志発島では昆布と並んで乾燥貝柱も沢山作っていました。学校帰りに干してある貝柱をポケット一杯に詰めて食べながら帰ったそうです。

羨ましい話なんですけれども、ここに志発島から拾って来た貝殻があるのですけれども、これは凄く膨らんでます。こう言うのが一杯、海の中とか砂浜に今もあって、割れたのもありますけれども、拾って来て皆さんに見せたりしています。

昭和の初め、択捉島の紗那では豊漁が続いて景気が良くて、例えば畳の下にお札が敷いてあったとかと言う話も聞いていますし、その島で三越の通販で買い物をしていたそうです。それから噴水があったり、紗那の町の中にテニスコートもあったそうです。また、蟹缶がありますよね、時々食べますけれども。あの白い酸化防止の紙、あれは国後島の缶詰工場が一番最初に始めたと言われています。

歯舞群島と国後島は、主に根室が経済圏で物資は根室から入っていたそうです。択捉島には、函館からの船が入っていました。先程お話した単冠湾は、冬でも結氷しなかったもので、一年中物資や郵便は途絶えなかったそうです。

豊かなのは水産資源だけではありません。先程の火山もそうなんですけれども、雄大な自然です。分かり易く言うと、知床が何十もある感じですね。山、川、森、高山植物、滝、湖、湿原、温泉。そこには熊、海鳥、シャチ、鯨、ラッコ等の生き物が生息しています。

現在、ロシア人が住んでいる所を除いて、ほとんど手付かずの自然です。最近、ロシアの国家予算等が付いて、整備が急ピッチで進んでいます。また、資源の蟹を採るだけ採っちゃったりとか、乱獲しているのでこれらは壊されつつあります。こう言った環境面から

も、返還を急がなければならないのです。

私はビザなし交流が始まった年に、島に行く機会を得ました。約20年前ですね。先程お話をしたような、子供の頃のイメージを持ったまま参加しました。とにかく行ってみようと思いました。

初めて目にしたのは、国後島の古釜布です。湾には、たくさんの沈船が放置されていて、見える建物は潮風にさらされた古い建物ばかり。廃墟のように見える島を、何故ロシアは返さないのか。これが、知床旅情で歌われている「遙か国後」なのかと凄く悲しくなったのが、最初に錆色の景色を見て一番最初に感じた事です。択捉島も色丹島も同じような錆色でした。

でも、天気が良くなると青い空、溢れる緑、素晴らしい自然が目飛び込んできました。ロシア人も明るく、子供の頃から持っていたイメージを捨てるのには、それほど時間は掛かりませんでした。

この初めての訪問で、私達の中に択捉島出身のお爺さんがいました。私達はその時、運悪く嵐に遭い、択捉島のオホーツク海側で丸一日停泊したのです。そこはお爺さんの故郷の村の沖合だったのです。嵐に遭わなければ夜中に通り過ぎるだけの場所で、そこに丸一日大きく揺れる船の中で停泊する事になりました。その間、島の事をたくさん話してくれて、お爺さんはずっと島を、故郷を見ていました。私達には見えない色んな事を見ていたのでしょう。

天候が回復をして、夜中に船は錨を揚げました。その時、元漁師だったお爺さんが直ぐ近くにある山の上の雲が取れば風向きが変わるから、そうしたらゴーだと言って、船長さんにアドバイスをして船は錨を揚げたそうです。

真っ暗なデッキに出て、島に眠る家族に般若心経を唱えたと次の日の朝、聞きました。私はお爺さんに言われました。「ネネコ」その時お爺さんは東北に住んでいたの、ネネ

コ、お姉ちゃんですね「俺はもう島には来れない、後は頼むぞ」「そんな事はないよ」と言ったのですけれども、胸が一杯になりました。鮭は産まれた川に戻って来ます。鮭になっても帰りたいと言っていました、願いは叶う事なく亡くなりました。

私は2007年に、家族で初めて志発島の母の居住地区に行きました。同じ地区に住んでいた人達が「あんたの所はここよ」と教えてくれたり、初対面の方からは伯父や伯母の話を聞かされました。

先程、ホタテの貝殻をお見せしましたが他にもあります。生活していたお茶碗の欠片とか、石炭。これは、海岸に一杯落ちているのですけれども、多分海底に鉱脈があって波で削られて打ち上げられ、角が丸くなっていて、戦前も集めて燃料にしていたそうです。これは子供の仕事だったそうで、元島民と一緒にいくと皆さん島にいた時は子供でしたから、子供の時の事を思い出して一生懸命拾いました。それとこれは、元島民が多楽石と呼んでいるのですけれども、メノウの種類でこれが波打ち際で、本当にキラキラ光って見えるのですよ。だから皆で下ばかり見て、ジャブジャブ波打ち際を歩いて必死に探して、誰のが大きいとか言って、皆と一緒に探して拾って来て、皆さんにお見せしています。

占領された1945年には、母の家族は島は空襲が無かったのですけれども、札幌の方の山の所だと空襲が来ないと言う事で、そちらに行っていて、島には誰もいなかったのですけれども、祖父の大きな船が志発島の沖に停めてあったそうです。

ソ連兵の見張りが手薄の内に、子供と年寄り、女性を根室に逃がそうと言う話になって、地区の人達が乗れないほど集まって、さらに大きな船と小舟を曳いて、倍の時間を掛けて根室に向かったそうです。

占領後、初めて大勢での引き揚げと言うか脱島になったので、島の様子を知りたい役所の人やマスコミが港に多く駆けつけていたそ

うです。その船に乗っていた一家の妹さんも、一緒に志発島に行った事があるのですけれども、その方が「私は島を出てから生まれたのだけれども、あなたのお爺さんの船に乗らなかったら、私は今ここにいなかったのかも知れないのよ」と言われました。

去年の6月、2回目の志発島訪問に参加をしました。元住んでいた所の再確認と、出来るだけ一世の方のお話を伺おうと思っていました。昨年3月の地震の津波で、島にもやはり津波が押し寄せたと言う事で、砂浜には海の中でちぎられた海藻が砂浜に大きく積もって、浜辺の様子が凄く変わっていました。前に来た時確認したはずの場所も、この辺りと言うのは分かったのですけれども、頼りにしていた近所のお婆さんの兄弟がいて、もう80歳を超えているのですけれども、急にやはり体調を崩して来れなくなって、自信なく何となく確認をただけに終わってしまっただけで戻って来ました。

こんな状況だったのは私だけでなく、一緒に参加をした同じ世代の人もそうだったので、お互いの家の場所を皆で確認しながら帰って来ました。さっき、木下副会長からの説明でもありましたけれども、元島民の平均年齢はもう77歳を超えています。77歳と言えば戦争が終わった時点で10歳ですので、やはり10歳の頃の記憶と言うのは途切れる。凄く強烈な事とか、楽しかった事しか覚えていなくて、やはり記憶の引き継ぎをしっかりして行かなければと、この時に改めて実感しました。

志発島には何もありません。ロシアの国境警備隊が駐屯していて、何かエビ漁の時期には国後の方からロシア人がエビを採りに来るそうなのですけれども、ビザなし交流に参加した時も同様なんですけれども、元島民の方はただただ何もしなくても島に居たいと言う事で、ただ島を見ている。私達には見えない昔の景色や家族を見ているはずです。思いが伝わるほど切なくなって、出来る限り現地で

元島民の話を聞くようにしています。島への思いをより感じるからです。

皆さんもそうだと思うのですけれども、さっき会長がおっしゃっていた故郷と言うのは年を取れば取る程、懐かしくて恋しくなるもので、自分の生きていたのを振り返ったり懐かしんだりすると、必ず故郷を思い浮かべます。自分達の意味ではなく、出て来たままです。自由に行けなくなればなおさらです。

島からの引き揚げ方は様々です。志発島等ご紹介した島々や、歯舞群島の島々、国後島の北海道に近い地域等は嵐の夜や、見張りが手薄になった時に根室を目指して小舟で逃げて来た人も少なくありません。命を失った人もいます。

若い女性はソ連兵に見つかったら乱暴されるかも知れない。髪を切って顔を黒く塗って、服の襟には毒を塗った団子を忍ばせて行ったそうです。また、送り込まれて来たソ連人と暮らして、寒い時期に樺太経由で函館まで戻って来た人。なかには、村を出てから函館に着くまで3カ月掛かった人もいて、「うちの子供が小柄なのは、引き揚げの時とその後の栄養が足りなかったからだ」と言うお婆さんもいました。病気になったり、定住地がなかなか決まらずに、引き揚げ後も大変苦労されたそうです。直ぐに帰れると思っていた。残るとソ連人にならなくちゃいけなかったそうです。

去年の東日本大震災の後、岩手県に住む国後島出身の方にお見舞いの葉書を書いたのですね。そうしたら、その方は内陸にお住まいなので大きな被害に会われませんでした。後でお手紙を頂きましたので、その一節を紹介します。

「特に原発周辺の被災者の避難生活を思う時、住み慣れた国後島を追われ樺太の真岡の収容所で家族8人と共に過ごした半月程の日々を思い出します。」

と言うお手紙です。自らの意思ではなく、故郷を離れて先が分からないと言う事が、引

き揚げ時の自分達とダブったのでしょうか。同じ事を他の元島民の方もおっしゃっていました。

「島を返せと言うが、日本人は今さらこの島に住めるのか？」と聞くロシア人もいます。そう言う理屈ではなく故郷だから帰りたい。それだけで、当たり前の事なのです。私達二世や三世は、後継者と言われています。文字では後を継ぐ者と書きますけれども、何を継ぐのか、と考えました。67年間進展の無い後の跡を継ぐと言うのは、とても重いものです。元島民の後継者として崩さない事は、北方領土は4つの島で北方領土であると言う事と、今日、お話させて頂いた島への思いをしっかりと引き継いで行く、それが後継者の役目だと思っております。それぞれの元島民が抱えている島への思いを聞き伝え、感じ、一日も早い解決を目指して力にして行きたいと考えております。本日は本当に有難うございました。



北方領土の早期返還を求めて

志発島元島民 児玉 泰子 さん

皆さん、こんにちは。実は、皆さんのイメージの中では、元島民って先程から70幾つとあって話が出ていますので、もっとお年を召した方がいらして下さるのではないかと思います。私、かろうじて一世なんです。

生まれが1944年、終戦の前の1年前です。ただ、島に居たのが3年間でした。3年間居たから、じゃあ島が分かるかと言ったら、3歳の話の出来ると言うのは殆ど無いと思います。実際、時々友達で3歳の頃の話を読んだりする方がいて、凄い人があるなと思いますけれども。ただ、私は元島民の一人として、役目を果たしておりますので、家族がどんな思いで島で育ち、そしてどんな思いで多くの人がいるかと言う事を一世の立場で色々な所で語り伝えております。

私、実は長年、北方領土返還運動の現場で活動しておりまして、東京にあります団体の事務局長を私がボランティアでしております。そのボランティアでやっている中で、神林さんがボランティアでやはり手伝って下さってます。そのボランティアの、連合体の初代の会長が山高しげりさんなのです。

皆さんのお年で、山高しげりさんと言うお名前を聞いてもピンと来ないかも知れませんが、全地婦連の会長さんがビキニ環礁のマグロ事件があった時に、主婦として女性の食事の問題として、しっかり食事の事をやって行こうと言う事で、婦人団体を作り上げたのが山高しげりさんなんです。山高先生が、北方領土も食卓からやろうと言う事で女性団体として手掛けて下さった訳です。山高先生が

亡くなって、その後もその団体の連合体は続いておりますので、地婦連さんとは非常に長い付き合いでございます。

元島民としては新参者ですが、北方領土の返還運動は40年以上やっておりますので、返還運動の現場は良く分かっております。今から私が話させていただきますのは、先程から北方領土の概要について色々話が出ましたが、まず北方領土の概要をもう少しちょっとだけ話して、それからソ連の上陸時の話。上陸時の話は皆さんのお手元に、これが非常に分かり易く三部作になっております。これ実は、私共が作りましてそれを北方同盟さんが今回、分かり易く編集して下さいました。これを、家庭とか学校とかで色々な所で話すと凄く良く分かると思います。とても良く纏められたなと思っております。そして強制送還でどのような事があったのか、後は望郷の念を話して、それで望郷の念と私が故郷へ帰った話、家族の話等をさせて頂きたいと思います。

まず私の事から話をしますと、私が生まれましたのは齒舞群島で、今日はと言う訳か志発島の2人なのですが、また何かの時になったら他の島の話も聞いて頂ければと思います。私は齒舞群島のこの志発島と言う所のこの尖がった所、通称、「さんかく」と言います。本当に良い名前を戦前の人は付けたなと思うのですけれども、「志発島の何処なの？」と言ったら私は「三角」って言うのですけれども、「あっそうか」と言って旧姓を言うと、「あっ、あなたの家は凄い馬を持っていたのね」ってさっき神林さんが言いましたが、その位、島民は家族みたいに話をしま

す。どの島へ行っても、どの村へ行っても共通でした。と言う事で、そこで生まれました。

この島は、根室から23キロの所にございます。歯舞群島の中で一番大きいのですが、地図を見ますと色丹の方が大きいですが、戦前の人口は志発島の方が多かったんです。なぜかと言うと、昆布がたくさん採れたからです。昆布が採れると、昆布と言うのは海の原点でして、昆布が育つ所にはウニとか花咲ガニとか、甲殻類が育ちます。甲殻類が育つと、それを餌にしたラッコとかアザラシとか色々な海の生き物が来ますので、海の中でやはり昆布というのは基本的な海の大事な産物です。たくさん昆布が採れたから、人口も多かったです。

当然、我が家は昆布漁を営んでおりました。その先祖をもっと紐解いて行きますと、北方領土と言うのは意外と東北の方が多いのです。他の県もありますが、私の先祖は岩手から入っております。南部藩がその開拓に入りまして、我が家の先祖は家財を全部売って船を買って、それで島に入りました。その頃の島と言うのは、牧草地で何もありませんでした。

まずどう言う風になっているかと言うと、昆布を作って根室に運び、根室から上海に輸出されていたのです。海外に移して非常に大きなものでした。その島で生まれて、私はのどかに、恐らく本当に何も無く砂浜で遊んだり、草原で遊んで花が咲いたら手折り、夕日が沈むと風呂に入って、もう本当に和やかに暮らしていたのではないかと思います。

ところが、私の島は1945年の9月にロシア人が揚がって来まして、そして占領されて、それから私共の家族は2年間島にいました。2年間ロシア人と暮らしまして、そしてその後強制送還されました。島の一角に集められ、僅かな荷物を背負って磯船に乗せられて、大きな船に乗せられてそれから各島を周って樺太の真岡に送られました。そして真岡でずうっと待っていて、そこから函館に送

られて、そして送られた家族は親戚とか、根室、そしてまた北方領土が返って来たら、必ず一番先に帰れる所と言う事で根室に住みました。

私が根室に住んでからの記憶の中では、5歳頃からの記憶はうっすらと分かったのですが、とにかく根室で育って今東京に住んでおりますが、お婆さんには見えるのです、私の育った所が。天気の良い日に「あれがオレの島なんだ」と「お前の生まれたのはあの島なんだ、必ずあそこに帰るんだぞ」と「帰りたい、帰りたい、帰りたい、帰りたい」と言っていました。

私は洋上から見て良く言うのですが、うさぎが飛ぶと言うのですけれども、こう言う白い波ですね、海が荒れますと。「あんな所になんで帰りたいのかな」「あんな所、何が良いのかな」と子供の頃思いました。だけど本当に「帰りたい、帰りたい」と言っていたのは、祖母でした。それは後でお話しますが、祖母が帰りがかった気持は、何年か後に分かって、「ああ、そう言う事だったのか。それじゃ私はその思いをしっかりと引き継いで行かなければいけない」と思って、未だに頑張っております。あと何年頑張れるか分からないと言うのが現状でございます。

それでは、先に北方四島の概要を話します。先程から人口とか大きさの話は出ました。皆さんが一番分かり易くお話するには、先程神林さんも、それから木下副会長もおっしゃっていましたが、国後島を基本にお話の方が良いです。国後島は沖縄本島より少し大きい。皆さん、沖縄本島より少し大きいと言うと何となくイメージが湧くのです。そして沖縄本島の2倍あるのが、国後島の2倍ある択捉島なんです。そうすると、本当に大きいんだと言うのが良く分かるのです。そこで後歯舞群島と色丹があるわけですね。

その位置が、これは名前が問題なのですね、北方領土って付いているからすごい外れにあると思っているのです。でもちょうど知床

半島と根室半島の間に、縦に入って行っているのですね。そこから択捉島の隣にウルップ島があって、そこから転々と18島があって、カムチャッカ半島につながっている訳です。

北方四島は、今ロシア人が住んでいます。それから今言ったカムチャッカの所のシムシム島とその下のバラムシル島にはロシア人が住んでいます。だけど、真中の16島には今、誰も住んでいないのです。こう言う事はあまり知らされて無いのですね。ですから、一番日本に近い所を抑えていると言うのが現状です。本当はずっと続いている国土なんです、完全に飛んで国土にしていると言う事です。

歯舞と言う島があると思う方はちょっと手を挙げて下さい。歯舞、国後、国後と言いますが、歯舞と言う名前の島はありません。小笠原が小笠原諸島で父島とか色んな島がありますね。それと同じです。では、何で歯舞と言うかと言いますと、根室からノサップに行く16キロの所に歯舞村と言う村があったのです。この村の行政区域が、この歯舞群島まであったのです。それでひっくり返して歯舞と。戦後に歯舞村と言うのは、2つに分けられてしまった訳ですね。ロシアに占領されて。そして本村は、戦後何年か経ってから根室市と合併をして、今は根室市の一部になっております。

歯舞群島は先程より出ていますが、どの島へ行っても昆布です。今年、5月の末に故郷へ行ったのですが、山のように昆布は打ち寄せておりました。近年、ロシアも昆布漁をしようとしておりますが、まだまだそれは出来ません。

それから先程話しましたホタテ貝も裕福です。その他海老もおりますし、私が海辺で見ていたらラッコがぼかぼかと次々に顔を出しました。アザラシも昆布に巻かれて寝ていました。ウソのような話ですよ。ウソのようだけれど本当なんです。それが目の前にいますね。ですから、如何に海の中のものが豊かであるかと言うのはこの動物を見てもお分かり

かと思います。

色丹島については、色丹島は太平洋側とオホーツク海で全然景色が違う訳です。リアス式海岸で、松が綺麗で本当に箱庭のように綺麗な所です。特に、ここは高山植物の宝庫です。ほとんど北海道では絶滅になったような高山植物がたくさんあります。

先程、会長さんが色丹に行きましたと言いましたが、色丹で恐らく行ったのは斜古丹とアナマだったと思うのですが、斜古丹とアナマにしか人間が住んでいませんから、その反対側の方が非常に綺麗な高山植物があります。ここには珍しい松がありまして、グン松と言うのが真っ直ぐ伸びて行かない松なんです。横に伸びて行くのですね、だから盆栽に物凄く適しているのです。こう言う松もあります。

国後はタラバガニの宝庫でした。皆さん、タラバガニでは小林多喜二の「蟹工船」が有名、または非常に人気にありましたが、先程神林さんが言ったように、蟹は採っても直ぐに食べちゃわないと、あれは活きが凄く悪くなりますね。缶詰にしても、何回作っても缶が腐れちゃうのですね。それは蟹独特の酸があるからなのです。それで試行錯誤してようやくあの紙を入れて、あれは意味があるので、あの紙があるのは。それをずうっと開発したのが国後島なのです。

そして国後島では、蟹缶をどんどん作って横浜から海外に送って、今でも女工節と言うのがありますが、紡績工場で働いた人もたくさんいましたが、蟹の最盛期にはたくさんの女工さんがいて夜通し操業しました。

その他にちょっと海辺の方に行きますと、ちょうど知床の斜め向かい側には凄い立派な柱状節理、これは海底火山が爆発してそのままぎゅっと高くなって、岩が材木を立てたようになる。これが材木岩と言いますが、ここに立つと人間ってちっぽけに見えちゃう位、立派な所があります。後は温泉もあります。歯舞群島と色丹には温泉はありません。

国後は温泉があります。その他、ここの泊山と言う所が、この地図を見て頂くと分かるのですが、この所に泊と言う村があってここの真中位に泊山と言うのがあるのですが、ここにはカルデラ湖がありまして、ここは素晴らしく温泉も湧き出るしとっても良い景色の所です。蛇は不思議にこの四島では、この国後島のここにしかいないのです。蜚の北限もこの辺りだと言われております。

それから択捉島については、本当に山が、ずうっと山です。択捉島に行くと山、山、山と言う位山があります。そう言う山があって、大小200本位の川が流れているのです。川は良質のミネラルを運びます。だから滝になって流れたり、海に流れております。そのためにオキアミが育ち、そしてラッコが育ち、最後はシャチまでがいると言う海の宝庫です。

ここの一番北の方に、ラッキベツと言う所があります。ここの所には滝がありまして、ここが一番落差がある滝で、崖がこうあって海から見ると落差141メートルの滝があるのです。素晴らしい滝です。私は何で見たかと言うと、ビザなし渡航では見れないのですが、自然の調査団と一緒に海の択捉島を一周した時に見ましたが、話には聞いておりましたが素晴らしい滝があります。その他細い滝がたくさんあって、本当に水の豊かな島だと言うのが良く分かります。

川が200本もありますから大湿原があります。春から秋まで色々な花が咲きます。7月の初め頃行くと、エゾカンゾウ、ニッコウキスゲとか言うあの黄色の花が一面咲いて、野原が海から見ると全然色が変わっていると言う位、雄大なお花畑があります。

そう言う意味では、海鳥も貴重なエトピリカ、嘴が赤い鳥、それからケイマフリと言う海のカナリアと言われていたのですが、ヒュルルーヒュルルーと鳴くそうですが、これも北海道では絶滅と言われていますがこれもおります。

素晴らしい自然があるのですが、問題は最

近、ソビエトがロシアになって自由経済が入って来て、定置網が入れられるようになりました。その結果、海のそう言う動植物がいなくなっている。更に密漁が増えていて、ウニが殆ど絶滅、花咲ガニも絶滅、と言う意味では大変な事になっております。最近ハマコがかなり採られて中国に輸出されております。海が荒れると言う事は、色々な意味でその影響は物凄い大きくなって来るのではないかと思います。年々それが経て行くと、益々恐ろしい事がこの海で起こるのではないかと思います。

それでは開拓した頃の話をしします。私の曾祖父は、南部藩に入りまして昆布をやるのですが、皆さん昆布を干している所と言うのはあまり見た事はないのではないかと思います。見た事がありますか。ノサップ岬に行くと干場がたくさんありますよね。私の所の島で干場を作る時、血と汗で開拓したと言いますが、先ず干場づくりから始めなきゃいけなかったのですね。ただ草わらを採っただけで昆布を乾燥しても、昆布にはならないのです。そこに先ず少し土を入れます。固めるのです、しっかり。その上に石を敷きます。その上に砂を乗せます。もう一度石を敷きます。それをしっかり固めるのです。その中央を少し高くするのです。傾斜を付けます。そこに溝を掘るのです。そうしてその上にもう一度小砂利を入れて、そして砂を入れます。これでようやく干場が出来るのです。

鋤一丁で入って行った先祖は、本当に大変だったと思います。何故溝を掘るかと言うと、雨が降ったりしたら水はけが良いようにする為です。水に当たると昆布は生産物として何の対価もありません。従って、それから始めたと言うのが私共の先祖です。今行ったらそんな事は簡単だろうとお思いでしょうけれど、船を持ってあの島に行った方達は寒さに向かって色々な事をたくさん行って、生活をしたのだと思います。

島は水が豊かです。尖閣もようやく水があ

るという事がこの間分かりましたが、島で生活するには水が無ければ生活できません。湧き水がたくさんあります。従って、人々が生活するには十分な所です。春から冬まで一生懸命働きます。冬の雪が降り出すと、翌年の準備に入る訳ですね。皆、村祭りをやって、冬になると皆で集まって花札をやったり、宝引きと言うのですけれど、こう言う紐で集まったりして何処の誰が上手とか、後は敬老会に集まって、うちの祖父のドジョウすくいが村一番の人気だったと言うのですけれども、皆が家族のようにして生活していたそうです。

食料品はほとんど根室から歯舞群島に運ばれておりました。定期船が来ます。定期船が来ますが、海獣のアザラシとかラッコを獲たら塩漬けにして、後は味噌漬けにして冬用の越冬用の食料を作ります。野菜は作ったものをムロと言って、畑の所に穴を掘って埋めて置きます。そう言う事をしておりました。

あとは生活を支えていた昆布と言うのは、物凄い潤いがありまして、製品にする事と、もう一つは昆布をこんな大きな釜で煮るのです。そうするとヨードが出来ます。皆さんヨードと言うと良く分かる、これはチエルノブイリとかこの間の福島でもあります、原発の例ですけれどもヨードチンキと言うのがありましたね。これの原料になる訳です。ですから薬品会社にこの煮たのを送る訳ですね。後は、磯にたくさん昆布が打ち寄せますね。これを拾って燃やすんです。そうするとカリが出来るのです。カリは火薬の原料になる訳です。これも軍に納めました。そう言う意味では、昆布と言うのは非常に貴重な物で、だから島の漁師達は豊かだったのです。

歯舞群島はそうですが、択捉島は物凄い鮭がいました。先程言いましたように、一年中皆何処の店でもどの島もそうですけれども、付け買いをするのです。付け買いをして、秋になるとお金を持って行くものですから、皆こんな袋にお金を入れてお店の人は帳面でこ

うして。そうするとお金が積んであるので、郵便局がそこに両替に来ると言うのですね。その家によっては、さっき言ったようにあまりお金があつて危ないからと言って、畳を上げて下に並べて春まで置いておく。

先程、私はどうしてこんなに祖母が行きたがるのか不思議であると言う話ですが、ある年の海が明ける春の、海明けが遅かったんだそうです。とうとう皆、米が無いと言う事で根室に買いに行かなきゃいけないと、漁師が集まって船を出して根室に米を買いに行きました。その米を買いに行つて、帰つて来る時に三角と言う所は非常に波が荒い所なんです。ちょうど、こうなっているものですから潮の流れで。そして、「帰つて来た、帰つて来た」と言って家族とか村人が丘の上から見ている時に、横波を受けて船が転覆しました。それで祖母は娘の時ですけれども、見ている前で自分の父親が波に吞まれて死んじゃった訳です。波に吞まれて死んだ為に、祖母は凄いショックだったんですね。月命日には、毎月丘の上に行つて海に手を合わせると言うのが娘としての役割だったと。だから、強制送還されてからその役割が果たせないと言う事が、非常に祖母の心残りだったらしいのです。

これは、私が祖母が亡くなってから初めて島に行った時、他の島の人が「あそこであなたの大おじいさんが亡くなって、お婆ちゃんはいつもあそこの丘の上から手を合わせてお参りしていたんだよ」と言うのを聞いて、それで私は「ああ、だから帰りたかったのか」と思いました。その立った時に「ああ、故郷とかそう言う思いと言うのは、皆そうやって引き継いで、色んな思いを引き継いでいく」そうしましたら他の方も「うちの爺さんも亡くなってんだぞ」とか色んな話がありましてね、そう言うのを乗り越えてあの島は開拓された訳です。どの島もこう言う物語があったのではないかと思います。

もう一つ言いますと、私の祖母はずうっと嘘づいて非常に利かない人でした。漁場を仕

切っていたのは祖母でしたが、引き揚げて来てから何年か経って、ずうっと「帰りたい、帰りたい」と言っていたのですが、70を超えてどんどん老いて行って、自分でも居た堪れなくなったのじゃないかと思うのですが、12月の寒い日にとうとう川に身を投げて亡くなりました。

私は、お婆さんが「帰りたい、帰りたい」と言っていました、その頃まだ墓参も無いし、自由訪問も無いしビザなし渡航も無かったので、とうとう一回も島に行かずに川に身を投げて死んだと。川の水は直ぐ海に繋がって、ノサップ岬の近い所の川で身を投げましたので、恐らく祖母の思いと言うのは波に繋がって、海に繋がって島に届いたのじゃないかと思いますが、それを見ていた時にせめて私だけはどうしてもこの足で島に登ろうと、その為に返還運動をするしかないと思ってずうっと厳しい中で、「生意気だ、生意気だ」と言われながらも政府にも勝手づきながら、返還運動をやっております。

私の島にロシア人が来た時の話をもう少しします。9月2日に大きな船が洋上に現れたそうです。その前に、8月28日に択捉島の留別にロシア人が揚がって来ています。ロシア人が揚がって来た時の話については、今詳しく話をしません。それについては、ここの占領編と言う所に詳しく入っております。先程神林さんが馬の話をしましたが、ここで馬が大変な活躍をしてくれています。次に何処に来るだろうと言うので、皆戦々恐々としていました。

その前の7月に、根室がアメリカ軍の艦砲射撃で焼け野原になって、2週間位延々と赤く空が染まったそうです。それを見ていて、何れは自分の所もアメリカ兵が攻めて来るんじゃないかと思っていたそうです。ところが8月15日、集まれと言われてラジオから流れる放送を聞いて、「そうか戦争で負けたか、これからどうなるのだろう」でも、このまま島に留まると言う事で、9月2日洋上に大き

な船が現れました。「あっ」と思って「いよいよ、来たか」と言う事です。そして揚がって来たのがソビエト兵でした。そして銃を持っていました。

これですね、文化・風習の違いと言うのは、本当に人間というのは文化・風習が違ふと恐ろしさを増すのでしょうかけれど、ソビエト兵は皆土足で銃を持って家に上がり込んで来た訳です。それが先ず怖い訳ですよ、言葉も通じない。まず、女性が乱暴されるのではないかと言う事で、私はその時ちょうど1歳でしたので、母は私を抱えて屋根裏部屋に隠れたそうです。後の兄弟は下に居て、祖父母とか伯父とか伯母とかと居た。ソビエト兵が毎日見回る訳ですね。その内、先に行った所に軍人がいたので、軍人の所を撤収してそこにソビエト兵が住むようになりました。それからは、島を巡回するのに家の馬を使って、うちは父が軍馬の種馬を預かっていまして、馬の生産をしておりましたので、昆布漁もやりながらそれもしていましたので、うちには良い馬がいました。

ある時に、ロシア人が違う馬で来たのですね。雌の馬で、そうしたら雄馬だから敷地に雌馬が入って来たら分かるのですね。凄い暴れたそうなのですね。そうしたらロシア人が、銃を出してうちの大事な種馬を撃ち殺してしまったそうです。「やっぱり」と言う事で人間は殺されませんでしたけれど、それを見て本当に怖いロシア人と思った。

隠れていましたが、安心して来て、母は1週間位だからと言って毎日屋根裏に隠れている訳に行きません。それで下に降りて行って、ある日私を抱えていたら、予想に反してソビエト人が上がって来たと。居るはずのない家族がいる訳ですね、子供を抱いて。家族は本当にびっくりしたそうです、何か起こるのじゃないか、誰かを匿っていないかと言う事で巡回していたら、先ず兵隊を匿っていないかと言う事が第一だったのですが、家族を匿っていた。ともかく皆、氷ついたそうです。

そうしたら、そこで家族は信じられない光景に会ったそうです。そのキャピタンと言うのが隊長なんですが、母に向かって両手を出したそうです。言葉は通じない訳ですよ、全然。でも、何か怒っている様子じゃないのですね、にこにこしながら両手を出した。その仕草を見て母は「もしかしたら子供を抱きたいと言っているのかな」と思ったそうです。薄情ですね、渡したそうです母は。渡したら、そのキャピタンが本当に上手に子供をあやしたそうです。その姿を見た時は、母は馬を撃ち殺されていますから凄惨な憎しみを持っていたけれど、だけど「ああ、この人達も同じように血が通った人間なんだな」と言う事が分かった。そうしたら、何かホッとしてもう下に降りて毎日生活出来るなと言う風に思った。そのキャピタンは、どうも身振り手振りで「自分にもこの子位の子がいるんだ」と言う事をしたらしいのです。巡回する度に來て、私は泰子なんですけれど、ロシア人の「あ」と言う字と「こ」と言う字が混ざったような発音をするのです。「たいか」と言うと、私はその人の子供のように馬に乗って巡回していた。私はだから兄弟に良く言われるのですけれど、「お前はと言う訳かロシア人に好かれて、変な奴だ」と言われるのですが、怖い思いもしたけれど温かい思いもあったそうです。

その間にもう一つあったのは、うちは私が乳飲み子だからホルスタインとヤギを飼っていて、おっばいの代わりに吞ませる為に牛乳とヤギの乳を搾っていた。ロシア人も家族で入って來て、やはりと言う母乳の足りない人の為に瓶を持って牛乳を買いに來るそうです。毎日買いに來て、雨が降ったから中と言って、お宅は泰子だけで、ヤギがいるからヤギで良いじゃないかと。だから、このロシア人の為にホルスタインを分けてくれと言ったそうです。そうすると心情的には親ですから気持は分かる訳ですね。それでしょうがないだろうと言ってホルスタインを譲ったら、

ある時行ったらいなかったんですって。それは直ぐ食べちゃった。とにかく肉が食べたい。だから何と生産性の無い人達だろうかと、いればまだまだ使える訳ですよ。ホルスタインを運べる訳じゃないですから、根室から船も出ませんしね。家は鶏をたくさん飼っていて、向こうも家族で入って來て、夜遊びに來ても仲良くなる以外ないのですよね、共同生活だから助け合うしかない訳ですよ。毎日來て、ご飯を食べて帰ると言う、何か鶏小屋が賑やかだと思って行ってみると鶏をこうやって、見つかるのにやにやしながら返す。だからモラルの違い、先程の土足の話、見つからなきゃ良いと言うのが、要するにこの領土も同じなのですね。生活もね。

ただ、私達がこうやっている内に強制送還されると決まった時、キャピタンが回って來て、何処に送られるか分からない。先に逃げた人もたくさんいるのです。脱島した人、特に娘さんがいる人は怖いから。逃げる時には海が荒れた日です。物凄く荒れた日と霧のかかった日です。たくさん亡くなっているのです、その時に。要するに海が時化て。亡くなった話もこの中に書いてあります。

家も逃げようと、実は初めは脱島しようと思ったのです。ところがある時、冬の始まる頃に母が薪ストーブに火を入れた。そしたら煙が出ますね。そうしていたら、ロシア人が真っ白になって來た。「どうしたの?」と聞いたらうちは高岩と言うのだけれど、「高岩のうちは脱島とすると言う情報が入った」と。あの頃から、もうKGBで情報がありましたから、日本人でもやはり言う人がいますから、「脱島するとなったから見張れとなって、夜通し見張ってるのだ、交替で」と。と言う事を素直に言っちゃうのです。家族は「もう、この家は狙われているから、このまま島にいきましょう」と言う事で、島で暮らしていた。昆布漁のくせに、漁師はさせられなかったのです。どう言う訳か、ソビエトって道路を作らせるのです。シベリアに送られた人

もそうですけれど、皆漁師であっても船が出せないのですよ。皆道路工事に出されて、そうして僅かなループルを与えられてやる訳です。

そうしている内に、ある時強制送還が始まると言って、うちも脱島しないと言う事を決めていたから、そのままずっといようと思ったら先程神林さんが言ったように、どの島もそうですけれど、万が一残ったらどうなるんだってなったら、ソビエトの国籍に入られると。家も他の人達もソビエト人にはなれないと、我々家族はやはり日本人でありたい。日本人で生き続けて行く為には、どうしても島を離れなきゃいけない。私達は良く北方領土に行っていると、「あなた達は島を捨てたのじゃないか」と言うけれど、島を捨てたのじゃなくて日本人を選んだのです。それは、止むを得ずと言う形で引き上げる事になったのです。

ある日、引き上げる時にキャピタンが来て、「今から恐らく樺太に送られる。そこから何処に送られるか分からないから、着る物と食べ物を持って行け」って。「大事な物がたくさんあるだろう、長年住んだのだから。ただ、それを持って行くよりは、家族の健康を考えてそれを持った方が良いでしょう」って教えてくれた。昔は水道が無かったから、水瓶と言うのがあったのですね。それに色んな貴重な物は全部入れて、必ず島に帰って来るんだと思って、ソビエト人がいない時に穴を掘って、みんな埋めて来たのですよ、軒先に。必ず使うのだからって。それを私は子供の時から、「あそこにはこれがあるぞ、あそこにはこれがあるぞ。帰ったら使うのだぞ」って教え込まれて育った訳です。

そして島の反対側に送られました。炎天下の中で、延々と並べられて一人ずつ確認されて、うちは11人の家族だったのです。妹は産まれたばかりでした。そして乗せられたのが小舟でした、磯船に。沖合に大きな貨物船がいるのです。貨物船に乗るのに、梯子が無い

のです。何をされたかと言うと、私達は本当に荷物だったのですね。こんな網、モッコってありますよね、あれに詰められてそれでウインチでぐっと揚げられて、それでどさっと貨物船に入れられたのです。だから姉とかが言うには、引き揚げの時に一番怖かったのは二つある。これと樺太のトイレと言うのですけれどね。だから皆そこで、「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」って念仏を唱えたそうです。

そうして送られて、その船も貨物船なんです。貨物船を改造したものですから、トイレは殆ど下の方に一つしか無い。皆上に行って甲板でする以外ないのですね。甲板の所にも、簡易のトイレがあったそうですけれども、甲板にいる人達は寒いからその陰で寝起きしている。そうすると、お年寄りや何かはトイレに行くのにこんな真っ直ぐな梯子を上がって行けないから、缶詰の缶で用を足して家族が上に行って捨てる。そう言う事をやっていたから、凄いいががしていた訳ですね。そこへ持って来て、冬を迎えた時ですから海が荒れる中で、各島を周って樺太へ行く途中、甲板で用を足したものを含んだ海水がザブンと。私達のいる所に、頭から糞尿が降り掛かってくると、当然体力の無い子は死んで行った。死んで行っても死体を運ぶと言う事は許されないから、そして病気も出るからと言って海に捨てなきゃいけない。隠れて背負っていても、「連れて行きたい」と言っても、それは出来ないと言って止むを得ず海に捨てて来たと、ようやく樺太の真岡に置かれました。

真岡は雨が降っていたそうです。ずるずるの丘の上を、家族で歩いて行って、皆でとぼとぼ歩いて自分達の人生これからどうなるのだろうか、と、女学校に入れられました。女学校には、先に来た人もいて僅かな隙間しかない所に寝泊まりをして、トイレが先程言ったように大きな穴を掘って板を2枚、そこが冬だからツルツル滑って怖いし、塩味の本当に何の具も入っていないスープと黒パンだけで、「まんま食べたい、まんま食べたい」ご

飯食べたいと言う意味ですけど、「まんま食べたい」と言って体力の無い人がどんどん死んで行ったそうです。死んで行ってもそこにも置けない。そうするとトラックが来て死体を積んで何処かに行って埋める。持って来た物で大事な物は、みんな検査で晒されてちょっと高価な物は盗られる。本当に大変な中で、何日かいたらようやく日本の船が迎えに来ました。

そうして送られたのが函館です。函館に送られた時、本当に不幸だったのです、あの時は。お金をどうにか隠して持って来たのですね。ところが、円の切り替えで今までのお金が何の役にも立たなくなっちゃったのですね。

頭から全部DDTを掛けられて、日本政府から与えられたのは千円だけでした。それを握って全国へ散らばって行って、私の家族も必ず根室に帰るんだと、家もあったからと言う事で根室に行きました。

根室に行って、ようやく小さい船を買って、漁師ですから2年後に昆布漁に出ようとして、昆布の船を買った途中で父は事故に会って、亡くなりました。そう言う意味では祖母は島で自分の父を失い、引き揚げて来て自分の大事な長男を失う。祖母の心と言うのは本当にボロボロだったのではないかと思います。

少し望郷の念を話しますと、母は本土からお嫁に行ったので志発島と言うのは波が荒いので、波の音が耳に付いて眠れなかった、というのを良く聞いていました。本当に洋上から眺めて逆に興奮で眠れなくて、ようやく上陸しました。上陸したら、小石が一杯落ちているのです。こんな可愛い石とかが一杯落ちているのですね。歩くとサクサク、サクサクと音がして、ああこれが故郷の音あんだと、石ころがコロコロと転がって音がし、遠くの方では波の荒い音も聞こえるのですね。ああこれが故郷の音だと思いながら行きました。

本当に何も無い島でした。草わらでした。父はここで馬を育てていたんだな、昆布を

採っていたんだなと言うくらいで。ただお墓を参って帰る時に、自分の家には行けませんでしたから、だから帰りに「あっ何か忘れてるな、そうだ、お参りはしたけれど」と思って、せめてと思い、磯船の所からこうやって海の水を汲んで手ですくって飲みましたら、海水ですからしょっぱいのは当たり前なんですけれど、本当にしょっぱさを感じて、これが私達の戦後ずうっと家族とか島民が味わった味なんだなと言うのを感じました。その時に拾ったのがこの石です。

それを私が、ずうっと何時も何時も持ち歩いて、何かがあった時「そうだこの石を握りしめて返還になるまでは頑張って行かなくてはいけない」と思って、いつも握りしめている何でも無い石ですが大事に自分の故郷と思って握りしめております。

それから何年か後に、平成15年に私は自分の家の跡地に行く事が出来ました。その時、草原をずうっと、齒舞群島は1960年以降、全部家を壊されていますから何も無いのです。本当に野原だけなのです。見渡す限り野原です。沼があって、その沼は兄が「子供の時に僕の沼がこうで」と言っていた沼なんだなと思いながら歩いて来ました。

凄いですよ、元島民の凄さは。何も無い野原で、延々と40分も1時間も歩いて行って、自分の家の跡地に立つのですよ。あれは凄いな、先程故郷って話をしましたけれど、故郷って本当に凄い。先祖が導いてくれるのかどうかは分かりませんが、この位の草なのです。そこをずうっと漕いで行って。私が初めて行った時、6月でヨモギがもう生い茂っていて、それをかき分けて一人ずつここが家だ、ここが家だと行くのです。私の家は伯父と兄と一緒に行って、そこまで行って家の跡はヨモギが生い茂ってこうでした。

大体、伯父とか兄がここに家があったから、ここが台所でこちら辺に何か埋めた筈だぞと言ったらやはりカチンと言うのですね。埋めた物が出て来るのです。草が生い茂っている

中を見たら、この位の手水鉢が出て来まして、祖父が盆栽が大好きだったから「ああ、これは爺さんのあれだった」って言ってね、本当にそれで待っていてくれたんだな、本当にここで私達家族が生活していたんだなと思いました。

更に歩いて行ったら、急にこれ位しか無い草の所があるのですよ。そこを歩くと全然足の感触が変わるのです。ここはもしかしたら昆布の干場？って言ったらそうなんです。それが、先程私が話をした先祖が必至に作った干場なんですね。そこがちゃんとやはりあって、それだけ丹精したから草があまり伸びないのですよね。ここは干場なんだ、波の音を聞きながら、これが故郷の歌なんだ、毎朝、「さあ、起きろ」と言って、4時になったら起きなきゃいけないですから、4時に起きて昆布を干して、「さあ、ご飯だぞ」と言って笑い声だとか怒られる声とかしていた、家族の音が聞こえたような気がしました。そして帰って来ました。今年も行きました。

さきほど先程神林さんが大きなホタテの貝を見せましたよね。本来あれですよ。こんな貝殻が一杯あるのです。これはホタテ貝なのです。これはやはり私達の歳月ですよ。波に洗われちゃったのです。そして小さくなって、これがたくさん浜辺に落ちているのです。一昨年、総理にこれをお見せしたのですが、本当にこんな風になってしまうほど、私達の心は擦り切れているのですよね。ですから、それを大事に自分達の心の物だと思って大事にしています。

今年、私はもう一度故郷に行きました。もう一回、その間に妹と行った時には馬櫓を見つける事が出来ました。それは、うちの父だけが唯一手製の馬櫓を持っていたので、「ほら、泰子ちゃん馬櫓があった」「あーあった」とかと言って、ヨードの釜が出て来たりして、行く度に皆が色々な物を見て、皆それぞれ、そうすると18とか3歳とか、5歳に戻っているのです。みんながね。「ここでね夜遊会

をやったんだよ」とか色々な話をして「あー家族にこんな思いをさせたいな」「みんなこれを望みながら、行ったんだな」と言うのが伝わって来ます。

今年、実は5月末に行って参りました。私は団長なので団長で行くと凄い不便なのです。皆さんも何処かで団長をやると、きっと大変だと思うのだけれど皆の面倒を見なきゃいけないのです。従って、私は自分の家に行く事が出来ませんでした。

その代わり、実は行く前の3日間雨だったんです。5月の頃と言うのは、まだ草が伸びていません。枯れ草なんです、一面。そこに3日間雨が降ったから、スポンジ状況なんです枯れ草が。そこに80幾つのお年寄りが「おばさん、大丈夫？あそこまで行ってこれる？私は付いて行けないけれど大丈夫？」周りに若い人もいて、「行きたい。これが最後かも知れない」と。「だからどうしても行きたいんだ」「だから行かせて」と言うから「分かった」それは自分の祖母を見ているから良く分かるからと言って、若い人達も付いて、片道1時間半掛けて、その中をずっと自分の家の所まで行って帰って来て、私は違う火葬場の方をお参りして、遠くから見た人影を見て「ああ、行けたね」「良かったね、良かった、良かった」「何々ちゃん行けたね」「誰々ちゃん行けたね」と言う話をしたのですが、本当にそこへ行く時には自分の姿がやはり18とかに戻っているのです。不思議な位そうなんです、しゃんとして、帰ってきたら「あー疲れた」とは言うけれど、本当に笑顔は若い頃の島の顔に戻っておりました。

今年も、私は海に向かって手を合わせて参りましたが、これを本当は祖母にさせてやりたかったです。私の家族は11人でしたが、残念ながら半分亡くなりました。もう記憶がどんどん薄れて行きます。私は自分が生きている内にこんな不自由ではなく、本当にあの島に住みたいです。私は駄々をこねて「帰りたいくない」と言いたくなるのですが、なる気持

ちは団長だから抑えていました。

そして行く度に、私達は「故郷」を歌います。皆で最後に必ず「故郷」を歌って、涙を流しながら「故郷」を歌いながらいつも帰ってきます。「ふるさとは遠くに在りて思うもの」と言うけれどそうです。故郷はやはり何時でも行けて、心にしっかりあるものではないと思います。

お願いがございます。私の話は纏まりも無いものでしたが、私は祖母の事を思うと無念だろうと思うから涙が出て来るのですが、北方領土は私達元島民の北方領土では無いのです。北方領土は皆さんの日本の国土です。どうか皆さん、北方領土は自分のものだと思って下さい。小笠原だって返還されて住んでいる方は、小笠原出身の方が少ないのですよね。恐らく色んな意味で、色んな事が出来るのが北方領土だと思います。北方領土には、まだまだ可能性がたくさんあります。自分の家族が自分達で行くんだと、そうしてこの雄大な景色を見て堪能出来る、温泉にも入れる、そして素晴らしい花があり、魚が釣れる。

つい最近、ちょっと余談なんですけど、先月の初めにサハリンに行ってきた。サハリンで択捉の人と会った時に、凄い写真を見せられて大ショックだったのですけれど、1メートル80のおひょうが釣れていたのです。カレイの大型の、これが択捉の沖で釣ったもの、これが今年の夏に釣ったと言う写真を見せて貰ったのですね。

ですから、魚もととても釣れるし、良い所です。どうか自分が生きている内に、家族で行けるように頑張りましょう。ビザなし渡航で行くなんて言うのは、本当にまやかしだと思います。自分達が、自由に何時でも行って泊まれて、温泉に入って泊まるためには、領土の返還なしには行けないのです。

ビザなし渡航のように、限られたもので限られた時間で行っている事に満足しているような日本ではいけないと思います。どうか皆さん、自分が行く為には自分が頑張らなけれ

ばいけません。そのためには、声を絶やさないで下さい。県民会議さんがしっかりしています。先程、教育者会議をしている話も出ましたが、教育者会議では一番先に立ち上げたのもこちらの学校の先生で、全国に先駆けて、内藤先生が頑張って教育者会議を作ってくれました。

それから特に、ここは確か東海大学がありますね。プーチンをご承知のように、柔道が大好きです。ですからロシア大使館に対して、私共はそう言う所で柔道と言うのは引き分けではない、柔道と言うのは精神だと思います。そう言う意味では立派な精神を持って日本に北方領土を返して下さいと言うお手紙を日本語で書いて下さい。大丈夫です。それから総理にもお手紙を書いて下さい。総理に手紙を出しちゃいけないなんて言う法律はありません。総理にも皆さんが直接、「総理、北方領土をしっかりやって下さい」と言う手紙を書いて下さい。返還運動と言うのは色んなものがあるのです。署名活動だけじゃなく、そう言う事が出来ます。我々が言っているのは「総理、あなたが勇断を持って日ロ会議をやって頂かない限り、私達は行けないのですよ」と。一緒に総理と私達はあそこに行って花を見たいとか温泉に入りたいとか、そんな事を書いても何の失礼も無いので、是非、そう言う事もやって、大きな力で女性のパワーと言うのは一番大事です。そう言う意味では皆さんに期待をしておりますので、どうか頑張って下さい。有難うございます。

志 発 島



平成24年度
元島民の訴え 北方領土の早期返還を求めて
第23回「元島民の北方領土を語る会」集録

発行／平成25年 3 月

編集／監 北方領土復帰期成同盟

〒060-0031

札幌市中央区北 1 条東 1 丁目

明治安田生命札幌北 1 条東ビル

〔TEL (011)205-6500 FAX (011)205-6501〕

ホームページ：http://www.hoppou-d.or.jp

e-mail：hoppou-d@isis.ocn.ne.jp

写真提供 監 千島齒舞諸島居住者連盟

印刷／株式会社 正文舎
